出羽三山ドライブ旅行記

(pdf Version)

平成 12 年 10 月 3 日
平成 15 年 1 月 31 日(pdf 化)
阿部敏雄(敏翁)

この旅行記は、平成８年(１９９６)８月３～４日に出羽三山をレンタカーによるドライブ旅行したときのもので、本テキストの原文は、パソコン通信ネット　Ｎｉｆｔｙ－ＳＥＲＶＥのＳＩＧ　ＦＴＡＢＩの会議室図書室　私の旅日記（旅の思い出）に掲載したものですが、それを主体としてそれに画像を加えてみました。

尚、「敏翁」は私のニックネームです。

目次(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

はじめに 1
大日坊 3
注連寺 3
湯殿山 5
羽黒山 5
月山・東補陀落 6
羽黒山(その２) 8
土門拳記念館 9

はじめに

新潟の新発田の近くに仕事が有り、そのついでにかねてから一度行ってみたいと思っていた**出羽三山**を訪れる事にしました。スケジュールが決まったのが、１週間ほど前で、仕事の準備に合わせて、にわか勉強ですが、図書館から次の本を借りて読みました。

１）　日本の聖域　９　内藤正敏、戸川安章
「出羽三山と修験」
佼成出版社　昭和５７年

２）　図説・出羽三山神社１４００年　出羽三山社務所発行

３）　森敦　「月山」　４）　森敦　「月山抄」

また国土地理院　５万分の１地図で月山、湯殿山、鶴岡、酒田を準備、旅行案内とドライブ・マップを持って出かけることにしました。(左図は月山)

少しいそがし過ぎるとも思ったのですが、１泊２日で回れるだけ回る事にしました。宿は、羽黒山の宿坊街「手

向（ﾄｳｹﾞ）」の宿坊を電話で当たり、４軒目にやっと空いている「神林坊」を予約出来ました。

交通は、レール・アンド・レンタカーです。今回の旅の概要は次の様なものでした。

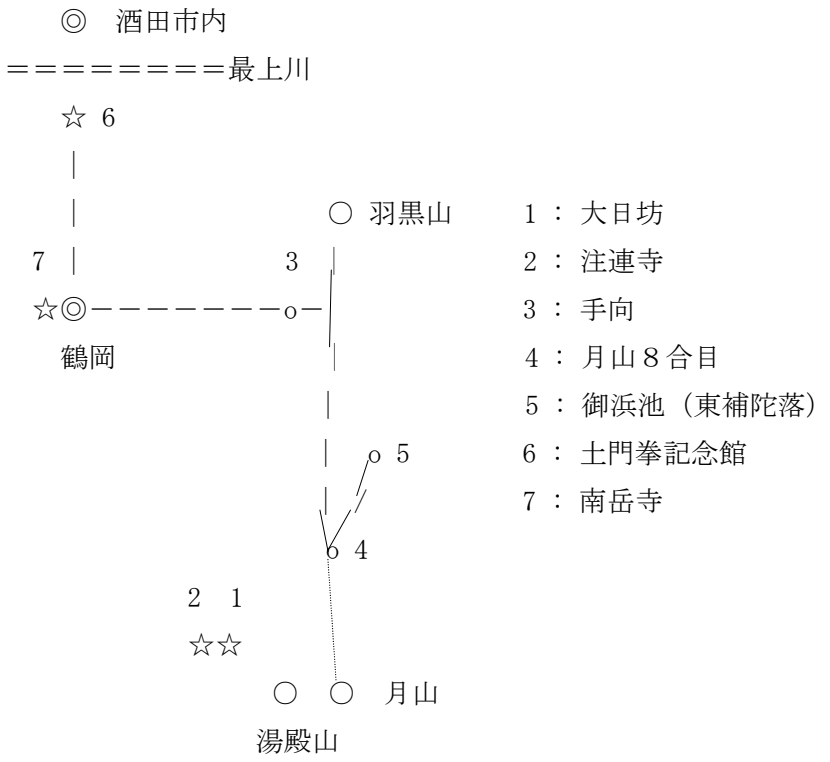
新発田－－（特急いなほ）－＞鶴岡　ここでレンタカーを借りる。

－－＞大日坊#－－＞注連寺#－－＞湯殿山－－＞羽黒山－－＞宿泊－－＞月山８合目（＜＝＝＞東補陀落）

－－＞羽黒山－－＞土門拳記念館－－＞南岳寺#－－＞鶴岡駅

尚、＜＝＝＞のみ徒歩往復（このためにエアロビクス・シューズ持参）であり、又 # はいずれも「即身仏」で有名なところです。　時間が足りなくて、即身仏で２寺（本明寺、と酒田の海向寺）を回り残してしまったのが、一寸残念でした。鶴岡と、酒田の市中見物（今回は全く無し）を含めると最低あと１日は必要でしょう。

関係位置を下図に示します。距離感覚などは全くでたらめです。



出羽三山とは、月山（ｶﾞｯｻﾝ）、羽黒山、湯殿山（ﾕﾄﾞﾉｻﾝ）の三山の事で、長く羽黒派修験道の聖地とされてきた。

羽黒山では、三山いずれも能除（後出）の開山と言うのであるが、注連寺、大日坊などは、湯殿山を弘法大師空海の開山と主張している。

明治の神仏分離で、殆どは神社に成ってしまったが、注連寺、大日坊はこれに激しく反対し、寺にとどまった。

８月２日（金）

会議（私の開発したプロセスのシミュレーション・ソフト関連）完了後、新発田の町で、訪問先の社長、技術部長（いずれも私の東*時代からの後輩）、本社・研究所からこの会議に同席してくれたシミュレーションの専門家Ｓ君と会食、その後はおきまりのカラオケ。駅前「第一ホテル」泊。

８月３日（土）

羽越線は、「村上」より北は、めっきり本数が減り、いなほ１号（新発田発９時４３分）を待たねばならない。

この列車は混んでいて、指定席がとれず、立ちどおしであった。　鶴岡には約１０分遅れ、１１時２５分頃到着。
駅前で、ざるそばを摂り、直ちにレンタカーを借りる。日産「パルサー」４ＷＤオートマチックであった。

大日坊

国道１１２号で湯殿山方面に向かう。約２０ｋｍほど走り、トンネルを２つ抜けた後、右折して先ず、大網の
【大日坊】に向かう。
(左図は大日坊の山門)
参観料５００円支払うと、拝殿には、１０人ほどが正座しており、祈祷中。なんとはなしに、私もその後ろに座る。激しい太鼓の音を伴う読経が終わるとその若い僧（２０歳そこそこ？）が梵天（竿の先に大きな白紙の束が付いている）を持って、お払いをする。その梵天の白紙の束で個々の我々の頭をすっぽり覆う様にされたのにはびっくりした。

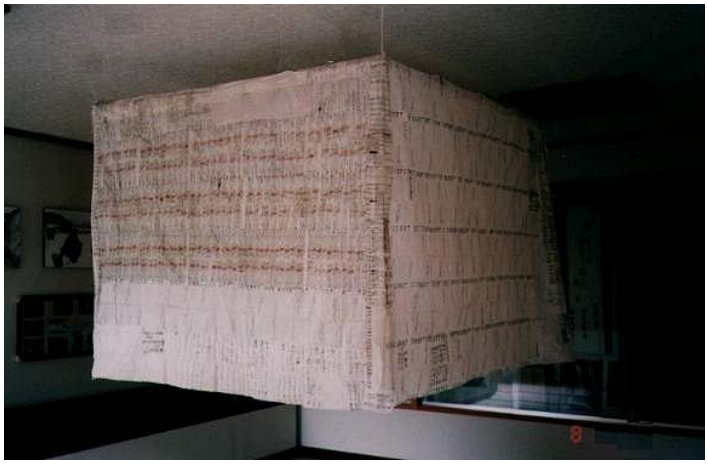
それが終わると年輩の僧の話になる。
「このお寺は、日本一（この言葉が口癖のように出てくる）のお寺でしたのですよお。弘法大師が中国で投げた２つの五鈷の一つがこの寺の前の杉に懸かり、大師が帰国の翌年（大同２年）に開いた由緒深いお寺なんですよお。もう一つは高野山に飛んでいったのです。
このようなお寺で、間口も４２間（７５ｍ）もあったのですが、明治初年の神仏分離に反対したため（注連寺などと反対したことは史実）、寺は焼かれ、（明治８年炎上は史実）住職は殺され、こんな小さなお寺になってしまったのですよお。反対しなかった羽黒山神社は今も大きいですが、昔はあそこも湯殿山神社もお寺だったのですよお。・・・」と延々と続く。
春日の局との縁（彼女の祈願が通じ３代将軍が家光になったと言うような話）、将軍家の祈願寺であった事などの証拠の品々の説明の後、別間に安置されている真如海上人の即身仏の前に座って又話を聞く。
「即身仏はミイラではありません。ミイラは死後はらわたを抜き、薬品で処理したものです。ですから黒いのです。この即身仏は黒くありません（確かにここのは黒くない）。真如海上人は、木食行の後、生きながら土中に入定し（天明３年、１７８８）、３年３ケ月後に弟子や信者の手で掘り出し荒い清めたものなんですよお。ですから、上人は世界一の即身仏なんですよお。
１２年に一度丑年に「お衣替え」をします。今度は来年です。古い衣は小さく切ってお守りになっております。霊験あらたかですよお。ここにありますから、ほしい方は千円でお持ちになって下さい。」
次は、その霊験の話がいくつか続く。２年前の話もあった。

ここで大勢がお守りやお札を求めている内にそのグループを抜け、庫裏の回りにある諸々の像（お沢仏といわれるいくつかの像、閻魔像、地蔵尊像、弁財天像などなど多数）を拝観して寺を出る。結局１時間かかってしまった。

注連寺

そこからそれほど離れていない七五三掛（ｼﾒｶｹ）の**【注連寺】**（ﾁｭｳﾚﾝｼﾞ）に行く。
この寺も弘法大師の建立だと言われている。

集落の名「七五三掛」の七五三（ｼﾒ）も注連もシメ縄のシメである。それはこれから先は禁域であることを示している。禁域は湯殿山である。湯殿山は、胎蔵界大日如来とされる大岩石をご神体とするのである。



先ず寺の境内にある**「森敦文庫」**（上左図）を訪れた。

森敦は、明治４５年長崎に生まれた。長く全国を放浪して歩いたが、昭和２６年（３９歳）晩夏より一冬を注連寺に過ごした体験を元に綴った「月山」が、昭和４９年１月の芥川賞を受賞した。

昭和５６年に「文学碑」、昭和６１年に「森敦文庫」が開設された。

尚、森敦は平成元年に亡くなっている。

「森敦文庫」は、小さな２階の建物で、その１階には、森敦の出版物が主体に並べられている。２階の目玉は、その中央に天井からぶら下がっている「和紙の蚊帳」（上右図）である。

これは「月山」の中に出てくるもので、森敦は庫裡の二階で寒さに耐えかね、和紙を綴じた古い祈祷簿をほごして、それを張り合わせて蚊帳の様な物を作り、その中にこもって寒さをしのいだのであった。

参観料５００円を払い、夫婦者と一緒に、解説者（おばさん）の説明を聞く。

森敦は、昭和５６年からは毎年８月下旬の月山祭に来たようで、その時の様子等もおばさんからいろいろと聞いた。

おばさんも懐かしそうに話してくれたが、ここの即身仏「鉄門海上人」の紛失事件について質問をしてみると、突然森敦が噂話に基づいていい加減な事を書いたので大変迷惑していると大分不満げな口振りになった。

寺が炎上（明治２５年）した後、酒田の海向寺（と聞いたように思うが後で考えてみると、海向寺自体も明治２７年に焼けているのでおかしい）に預けてあったのだとのおばさんの説明があった。

黙って聞いていたが、どうも史実は違うようである。

鉄門海上人は、生前から死後まで波瀾万丈だったようなので、生前の事を含めて簡単に記してみる。

上人は、鶴岡大宝寺に生まれた荒くれで、青龍寺川の水争いから武士２名を殺し、逃れて注連寺に至って木食行者となり、湯殿山仙人沢に参籠した。そこへ馴染の女が追ってきたが、自らの男根を切って女に渡し、もはや俗念を断ったことのあかしとした。その後、江戸に登って眼病の流行するのを見、われとわが左目をくり抜いて隅田川に投じ眼病退散を祈願した。

本明寺、海向寺の再建、南岳寺、盛岡の金剛珠院などの建立など幅広い活躍をし、今でも鉄門海の碑は東北一円から関東にも及び多く見られる。

以降は主に「出羽三山と修験」による。

文政１２年（１８２９）海向寺にて病死、高野浜で死体に海水を注ぎ、ヨモギの茎を乾かしていぶしかわかし、注連寺の天井裏に吊って即身仏にしたという。　（寺で貰ったパンフレットでは注連寺の本堂で入定とある）

その後明治以降、注連寺が荒廃した時、興行師に頼まれ、出開帳に出したがそこで行方不明になってしまった。

森敦が居た時は、その行方不明の時である。

森敦が聞いた噂、それを「月山」にも書いたのだが、は次のようなものだ。

鉄門海上人の即身仏は本物ではない。それは注連寺の大火の時に焼けてしまった。その後のものは行き倒れの「や

っこ」で作ったものだというのである。

「月山」にはここまで書かれているのだが、実はその後行方不明の即身仏は京都の宗教博覧会の会場で発見され、その指紋が、海向寺に残っていた上人の手形の指紋と一致したのである。そして現在注連寺に安置されているのである。噂のもとは、比較的近い過去明治年間（すでに法律で禁止されていた）になってから、鶴岡南岳寺の鉄龍海上人の死後、信者が墓を暴き、ひそかに注連寺に運んで即身仏に仕上げた記憶が混同したのであろうとの事である。

ここの即身仏は黒い。おばさんによると保存のため漆が塗ってあるとのことである。結局、ここも森敦文庫を含め５０分ほどかかってしまった。

湯殿山

【湯殿山】に向かう。田麦俣から自動車専用「月山道路」に入り、約１１ｋｍで左折、約１ｋｍで有料「湯殿山道路」に入る。約３ｋｍで仙人沢の大駐車場に駐車、ここから奥は、専用シャトル・バスで本宮に向かう。

バスを降りて坂道を徒歩約５分で、湯殿山神社本宮入り口に着く。ここで、裸足になり、お祓いを受けて本宮に入り、御宝前（＝御神体）に向かう。

ここからは、森敦「マンダラ紀行」の文章を借りることにしよう。

「眼前に現れた巨大な岩石は熱湯を湧出し、赤褐色に染まっている。それをよじ登ると耐え難いほど熱い。見下ろせば岩石は眼下遥かな渓流より聳え立ち、足元近くから、縦に深い亀裂があって、まさに爛熟した女陰である。これを胎蔵界大日如来と崇めるならば、胎蔵界大日如来は女陰なのか。女陰ならば何を胎蔵するのか。言うまでもない宇宙種である。この宇宙種がやがて昼の夜を生み出すように、金剛界になって行くのである。」

「出羽三山と修験」によると、岩塊は２つあり、上述の高くて大きい方の横にやや低くて小さいのがあり（正面から見ただけでは分かりにくい）それが金剛界大日如来なのだそうである。

いずれにしても異様な光景である。この御神体は昔より極秘中の秘とされ、口外する事も厳に禁じられてきたのである。今もその名残が強く、このご神体の絵はがき等はどこでも見つけることが出来なかった。＊

私の見た唯一の例外は、「出羽三山と修験」中にある小さな遠景の黒白写真だけである。

＊　：芭蕉の「奥の細道」にも「かたられぬ湯殿にぬらす袂かな」の句があるが、描写は一切無い。

羽黒山

これより、１１２号を鶴岡市内方面に戻り、４７号線に入り、約８ｋｍで大鳥居を潜る。更に約７ｋｍほど進み左に曲がるとすぐ有料「羽黒山道路」入口に至る。そこから２ｋｍ弱で**【羽黒山神社】**大駐車場に到着する。午後５時半頃になっていた。

（前頁図は**羽黒山神社**）

神域に入って行くが、お目当ての「出羽三山歴史博物館」は開館が午前９時から午後４時半までで閉じてしまっていた。出来れば明日又来ることとして三神合祭殿、**蜂子皇子墓**（正式な宮内庁の看板がある）などを見て回る。

蜂子皇子墓は、東北唯一の皇族の墓で、今も時折、皇族の参拝があるとのことであるが、その歴史的根拠は全く乏しい。

出羽三山の公式の立場は（図説・出羽三山神社１４００年）、第３２代・崇峻天皇の第一皇子・蜂子皇子が出羽三山の開祖と言うことになっている。

以下は、この分野の大家・戸川安章氏による。（「出羽三山と修験」）

平安時代には、羽黒山の修験者も、「役の小角」の流れを汲むと称していたらしい。ところがその後、**能除仙**（ﾉｳｼﾞｮｾﾝ）を開祖と仰ぐようになった。
この能除仙とは、はっきりしない人物なのだが、崇峻天皇の第三王子であるという文献がある。ところで、皇室の諸系図には第三子の事は記されていないのである。江戸時代になると、羽黒山歴史上最大の傑僧で政僧である天宥（ﾃﾝﾕｳ）等が、能除仙は第三子ではなく、太子・蜂子皇子であるという運動を起こしたが成功しなかった。その２世紀後に羽黒山の別当・覚諄（ｶｸｼﾞｭﾝ）が再び能除は蜂子王子であるとし、これに菩薩号をおくられんことを奉請した。

朝廷はしかし、能除を蜂子とは認めず、ただし照見大菩薩という諡号(ｵｸﾘﾅ)を授けた。それ以後、羽黒山では、開山を蜂子皇子であると称するようになった。最後に明治政府は蜂子皇子が羽黒山の開山者であることを認め、その墓所を羽黒山上に治定した。これが上述の墓である。

山を下り、今夜の宿である手向（ﾄｳｹﾞ）の神林坊に入る。手向には、かって３６０の宿坊があったといわれる。現在も三十数軒が営業をしているようだ。

「神林坊」（左図）は、山から下ってほぼ最初にある宿坊で、羽黒山表参道入り口である「随神門」から徒歩２分ほどの所にあり、となりが無料駐車場になっていた。

宿坊の中は、玄関を入った広間に注連縄が張ってあることを除けば、普通の民宿と差はない。ただ食事は完全な精進料理である。

珍しかったのは、夕食に出た「ところ天」と朝食に出た「あんころ餅」である。これは昔からの名物とされている「ソーメン」と「力餅」に因んで出されたものだと思う。

（本日終わり）

８月４日（日）

月山・東補陀落

朝、５時頃目が覚める。宿坊のおばさんに、**【東補陀落】**には簡単に行けるのか尋ねてみる。おばさんは奥に戻って聞いてきて、「そこは普通の人が行く所ではない。月山８合目で聞いてみなさい」と言う。

【月山】には、秘所として「東補陀落」と「西補陀落」がある。「出羽三山と修験」によると、「西」は先達でも一緒でなければとても行ける所ではないらしい。それに比べると「東」はアクセス可能らしい。昔、芭蕉も詣でたところであるらしい。５万分の１の地図には出ている８合目から約２ｋｍ程度下ったところにある「御浜池」の付近が「東補陀落」で、観音・妙見・三宝荒神、その他の神や仏と崇められる奇岩怪石が立ち並んでいるとある。

月山頂上に登るのよりは短時間で済み、且つあまり人が行かないところらしいので（人のやらないことをやるのが私のモットー）行ってみたくなったのだ。

このおばさんも父親の山伏姿の写真がこの宿坊の広間に掲げてあると言う人なのだが、それでも知らないところとなると、想像していた以上に大変なところなのかも知れないと思ったが、行けるところ迄行ってみることにした。

靴をエアロビクス・シューズに履き替え、６時２０分出発。昨日入った有料「羽黒山道路」のところで入らず右に曲がると「月山高原ライン」で、約１８ｋｍで８号目に行くことが出来る。
舗装は良いが細い道で、大型バスとの行き違いが出来ないところが多く、スピードが上がらない。
８時前だというのに８合目の駐車場は、満車であつた。大型バスも２０台はあったように思う。大分手前の道ばたに駐車し、レストハウスの主人に御浜池の行き方を尋ねる。「木道」を通って「月山神社・中社」まで行き詳細はそこの神主に聞くと良い。池迄３～４０分で行けるとの事であった。
中社の神主は、細かく道を教えてくれた。私の靴を見て一寸首を傾げながら「道はそうとうぬかるんでいるかも知れないよ、飛び飛び行くことになるよ」と言う。

指示に従って木道をはずれ、段々細い道に入っていく。所々ぬかるんでいる所だけ角材を切ったものが飛び飛びに置いてある。
しばらく（５００ｍ？）行くと、断崖の所に達し、目下に「御浜池」が見える。断崖に沿う道をもう少し進んだ

が、この道は笹で隠れて殆ど見えない。笹をかき分け歩くと
笹に留まっているトンボの大群が一斉に飛び立ち、トンボの霞の中を進むというビッグな体験をした。
この道もやがて完全に断崖で行き止まりになり、さらに進むには、鉄の梯子を数十ｍ（？下は見えない）下る必要がありそうだ。この鉄梯子の信頼性など考えると、一人ではこのへんで止めるべきではないかと逡巡していると、４０台後半（？）のご夫婦が後ろから現れた。「御浜池まで行くのですか」と尋ねると、「いや、それは無理です。私たちも此処までです。」との事。

御浜池とその左にある藁田禿山の間に、岩塊が並んで見える。そこらあたりが東補陀落の中心らしい。
（上の写真参照。上右の画像はビデオカメラでズーム最大にした画像）
「あれが例のものですね」と聞くと「そうです。男性のシンボルも見えるでしょう」とご主人。
奥さんが、その辺を双眼鏡で観察し出したので、それを借りて私も観察。
「あまり似ていませんね。写真集（「出羽三山と修験」の事）のは、もっと似ていましたよ」と私。「実はこの前の地震で崩れて様子が変わってしまったのです。私は３０年前に撮った写真も持っていますが、もっと似ていました」との事。ご主人は、望遠レンズ付きカメラを持っていたが、２００ｍｍのもので、これでここからあの岩を狙うのは無理ですと言う。私の感じでも最低５００ｍｍが必要と思った。
これで、昨日の女性のシンボルとしての湯殿山の御神体、本日の男性のシンボルと一応セットで拝んだことになる。これで今回の旅行で自己流ではあるが辛うじて真言・理趣経の世界の一端に触れることが出来たのかなと思った。

奥さんは、北の方を指さして「晴れていればこの方向に鳥海山が綺麗に見えるのに、今日は曇っていて見えずに残念ね」という。

若干未練はあったがここで、引き返すことにした。

中社迄戻ると、丁度月山からどんどん戻ってくる集団がいる（上右図）。たむろしている連中（年輩者が多い）が拍手と「ご苦労さん」のかけ声で迎える。元気の良い者だけが月山頂上にある本宮にお参りしてきたのだろう。

先達らしい人に所用時間を尋ねて見ると、早足で２時間程度かかるのことであった。

羽黒山（その２）

「月山高原ライン」を戻り、再び有料「羽黒山道路」を通って大駐車場に入る。そこから昨日閉館していた「出羽三山歴史博物館」に行く。

廃仏毀釈によって、出羽三山から追い払われた仏達の中で、幸いに焼かれたり、毀されたりされなかったものの代表的なものが一階に展示されている。

私の目当ては、二階にある天宥（ﾃﾝﾕｳ）の描いた能除太子（蜂子皇子）の画像である。（左図）

その怪異な容貌（目尻も口も大きく裂けている）を力強い筆致で描いた傑作であると思う。政僧天宥は、能除が蜂子とは信じてはいなかった筈で、伝説に伝えられている能除の容貌の怪異さが、その大きい仙力の象徴として素晴らしい（＝役に立つ）と思っていたのではないか？

１０時を回り、疲れたので、大駐車場の無料休憩場で、今朝宿坊で作って貰ったおむすびを食べながら休む。

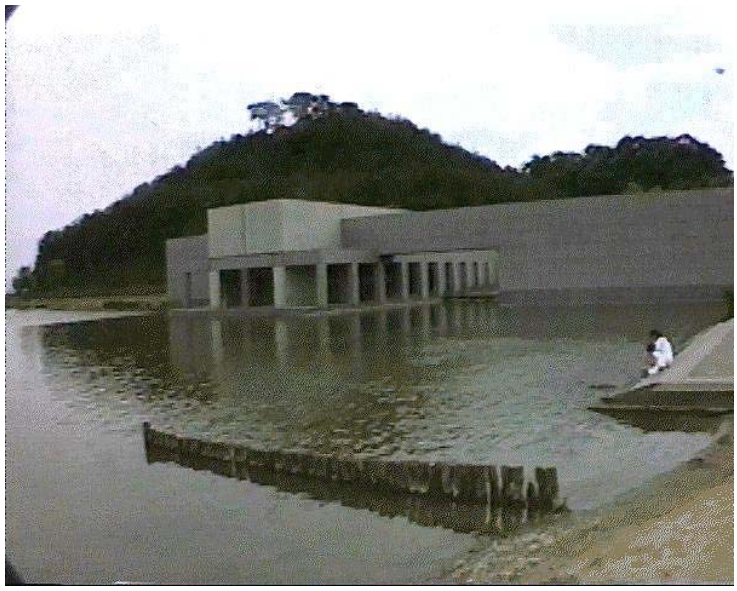
宿坊「神林坊」の隣の無料駐車場に戻り、「随神門」より表参道に入り、**「杉並木」**を五重塔まで歩いてみる。

国宝・五重塔は別として、この杉並木を整備仕上げたのも天宥である。
天宥（旧名宥誉）は、時の権力者天海大僧正に近づき、羽黒山のこれまでの法流・真言密教を天台宗に改宗する事を申し出、許された。さらに天海と師弟関係を結び、天宥と改名した（寛永１６年、１６３９）。

このようにして権力の基盤を確立した後、あらゆる分野で改革を進め、羽黒山中興の祖と言われている。ただその改革があまりに強引過ぎたためか、羽黒衆徒の造反、幕府へのざん訴により、晩年伊豆の新島に流され、そこで没した（延宝２年、１６７４）のである。彼は又万能の人であり、書、絵画、彫刻、造園などにも非凡な才能を発

揮し、今もその多くが残っている。

「五重塔」（左下図）は素晴らしい。平将門の創建と言われるが、再建されたのは、北条高時の正和２年（１３１３）である。柿葺素木造りの五重塔は回りの杉木立と良くマッチしている。



土門拳記念館

車で、近くの黄金堂にお参りした後、出羽三山とは関係ないが、前から是非行ってみたいと思っていた酒田の**【土門拳記念館】**へ行ってみることにする。

４７号線を戻り、１１２号線を北に進みそのまま国道７号線をどんどん酒田の方向に進む。「土門拳記念館」の標識が出てくるので、道はわかりやすい。１１２号線に入ってから到着まで、約２１ｋｍである。

最上川の南側、飯森山文化公園の中にそれはある。大きな池の傍らに建っているその建物も素晴らしい（１９８４年第９回吉田五十八賞受賞。１９８７年芸術院賞受賞）（上右図）。開館は昭和５８年１０月である。

写真家・土門拳は、酒田市に１９０９生まれた。幾多の傑作があるが、特に「古寺巡礼」、「筑豊のこどもたち」は有名である。

１９７９年に３度目の脳血栓で倒れ、以後１１年間意識不明のまま入院生活を続けた後、１９９０年９月１５日８０歳で死去した。

生前、彼は自分の全作品を郷里酒田市に贈っていて、酒田市はそれにこたえて、土門拳記念館を建てたのである。ここには土門拳の全作品７万点を収蔵しており、それを順次公開しているのである。

目録によると、ほぼ３ヶ月おきに展示を替えているようであり、現在の主要展示はモノクロ大型パネルの「室生寺」、展示Ⅰは１１ｘ４版のカラー「古寺巡礼」、展示Ⅱはモノクロ「こどもたち２」で、これは「筑豊のこどもたち」などからとったものである。

モノクロの「室生寺」も素晴らしいかったし、カラー「古寺巡礼」も、照明のせいか又はプリントの質が高いためか、画集で見るよりはるかにあざやかであった。

私は、写真集などを集めるのは好きな方で、古くは島田謹介の「雪国」、「武蔵野」、入江泰吉の「大和路」、緑川洋一の「瀬戸内海」、木村伊兵衛写真集などと持っていたが、当時「古寺巡礼」は高くて買えず、図書館で我慢していた経験がある。

ここで、たっぷりと土門拳を見ることが出来て、今回の旅行の締めとして大いに満足することが出来た。

土門拳のあのエネルギッシュでとことん突っ込んでいく撮影態度の中に、修験・荒行の匂いを感じたのは私だけだろうか？

ここからすぐのところにある出羽大橋を渡れば、酒田の市内に入れるのだが、時間の余裕があまり無く、又本日酒田市内はお祭りの筈で、混雑の中で動きが取れなくなることを心配し、ここで引き返すこととした。

鶴岡駅に比較的近い**【南岳寺】**の鉄龍海上人の即身仏＊（注連寺の項参照）を拝み（ここはおばさんの説明も約１０分と短かかった）、そばのガソリンスタンドで、満タンにしてレンタカーを返却した。

特級「いなほ」、上越新幹線と乗り継いで帰宅。

（実際は、秋田に大雨が降り、いなほが不通になり、大トラブルになったのだが、いずれにしても当日中に自宅には帰れた。詳細は省略する。）

＊：五来重　「**山の宗教**　修験道講義」　　角川選書２２３によると
「鉄龍海という人は、入定が明治十四年であるともいい、明治元年でもあるといいますけれども、よく伝のわからない、とにかく明治になってから入定した人もあります。なぜわからないかというと、この人の入定を明らかにすると問題があるというものですから、実際には元年に死んだのだが、のちに明治１４年の碑を建てたのだという説があります。」
これは、五来さんの勘違いか、ミスプリントで、実際に死んだのが明治１４年で、元年の碑があるというべきであると思う。これは明治元年に即身仏が禁止された為である。

完

敏 翁